論文

佛光寺の板木

――『四鳴蟬』――

永井一彰*

京都の真宗佛光寺派総本山佛光寺に三千枚を超す大量の板木が保存されており、その中にもともと佛光寺とは何の関係も無かったと思われる御伽草子・仮名草子などの板木が含まれていること、とりわけ注目すべきものとして仮名草子『因果物語』（平仮名十二行本）の板木が題簽を含めて全て残っていることなどは、平成十五年十月に新聞などを通じて発表したところである。また、これらの御伽草子（『ほうまん長者』『しゃかの御本地』）・仮名草子（『釈迦八相物語』『因果物語』）については、『日本古書通信』第八九五号収録の拙稿に「佛光寺の板木」としてその概略を紹介した。その後、慶安三年版『撰集抄』の板木も、題簽を除き九巻全丁分が残っていることも確認出来、こちらは平成十六年九月に新聞発表した。『日本古書通信』の拙稿にも記したことであるが、佛光寺の板木で厄介なのは、もともと寺の蔵版であったのではないかと考えられる内典の板木と、明治中・後期に近世の出版機構が崩壊したあと、近隣の本屋から運びこまれたと思われる町版の板木が混じっていることである。それらの板木については、初版及び後刷の版本・本屋仲間の記録・文書などを照らし合わせて、版権すなわち板木の移動を追跡し、板木が最終的に佛光寺に収まった経緯を明らかにして行く必要がある。筆者は今、慶安三年版『撰集抄』、西川祐信絵本数種などにつきその追跡作業を進めているのであるが、こちらは未だ報告出来る段階に至っていない。そこでこの稿では、佛光寺に残っていることがとりわけ奇異に思われる狂文集『四鳴蟬』の板木について報告し、その版権すなわち板木の移動について考えてみたいと思う。なお、図版は巻末に一括して掲載する。

『四鳴蟬』は「謡曲・歌舞伎・浄瑠璃の一節を元曲の様式を用いて白話訳した」（岩波日本古典文学大辞典「都賀庭鐘」解説）狂文集で、読本創始者として知られる都賀庭鐘の手になる。板木について触れる前に、版本によってその概略と版権の移動をおおまかに押さえておくことにしよう。管見に入った版本は次

平成17年9月2日受理
*文学部国文学科教授

の通りである。

① 奈良大学蔵本（故宮田正信博士旧蔵本）

半紙本一冊。縦二十二、九糎、横十六、〇糎。砥粉色元表紙。左肩に薄黄色地単辺刷り題簽、「四鳴（剥落）完」とある（図Ⅰ）。見返しは薄黄色地料紙を用い、匡郭内に「亭亭亭逸人譯／堂堂堂主人訓／四鳴蟬／浪華称觥堂」と刷り、匡郭外上部に「才子刊書」と入れる（図Ⅱ）。なお、見返し右上に魁星印を、左下には「渋川氏」の陰刻方形朱印を捺す。渋川氏はこの書の版元称觥堂こと渋川清右衛門で、この両印は刊行当時のものである。見返し右下の印は、旧蔵者である「相州波多野氏」の蔵書印。丁付けは版芯下部にあり、〇印の下に首一・首二（「明和八辛卯季冬／白亭居士書于堂堂堂」の序文、及び目録）、引一・引二・引三（亭亭亭主人記の「塡詞引」）、以下が本文で丁付けは一～三十一となっていて、一丁表から三十一丁表までの間に、「惜花記」（謡曲『熊野』の訳）、「扇芝記」（謡曲『頼政』の訳）、「移松記」（浄瑠璃『山崎与次兵衛寿の門松』の道行の訳）、「曦鎧記」（浄瑠璃『大塔宮曦鎧』三段目中頃から「身替り音頭」に至る部分の訳）の四作を収め、各話冒頭部の匡郭欄外右または左に「才子刊書一百十七、一百十八、一百十九、一百二十」と入れてある。「才子刊書」が見返しの表示に対応していることは判るが、この番号が何を意味しているかは不明。また、三丁裏・四丁表、十一丁裏・十二丁表、十七丁裏・十八丁表、二十四丁裏・二十五丁表に「桂眉仙かと推定されている」（後出『江戸怪異綺想文芸体系』2の『四鳴蟬』解説）各話に因んだ見開きの挿絵がある。刊記は図ⅢAに示したように三十一丁裏に「明和八辛卯年十二月／東都　通石町十軒店山崎金兵衛／浪速　心斎橋筋順慶町渋川清右衛門」と入れる。右下の方形朱印は、やはり旧蔵者波多野氏のもの。なお、江戸怪異綺想文芸体系2『都賀庭鐘・伊丹椿園集』（平成十三年五月、国書刊行会刊）収録の『四鳴蟬』の底本は東京藝術大学付属図書館蔵本であるが、これも奈良大蔵本と同じく渋川・山崎の刊記がある。底本の解題・翻刻によれば、装丁・内容とも奈良大蔵本に同じ。ただし、見返し部の魁星印及び渋川氏の印は東京藝術大学蔵本には無い。

② 京都府立資料館蔵本（特・852・1）

原本未見。国文学研究資料館から取り寄せた複写に拠る。題簽の剥落無く完備「四鳴蟬　完」。「四鳴」「完」の書体、奈良大蔵本に同板。内容も、見返し部の魁星印・渋川氏印をはじめ奈良大蔵本に全く同じで、同板。ただし、三十一丁裏の刊記部を「通石町十軒店山崎金兵衛」の部分に入木をして「江戸通本町三丁目西村源六」と改めてある（図ⅢB）。この部分が入木であることは、後で取り上げる板木によって確認できる。なお、『都賀庭鐘・伊丹椿園集』の解題によれば、渋川・西村相版が早稲田大学図書館に、また西村単独板が国立国会図書館にあり、いずれも渋川・山崎相版と同板であることが報告されている。『國書總目録』にはこれ以外に二本を紹介するが、未見。

さて、佛光寺に残っている『四鳴蟬』の板木は、表Ⅰに示した四丁張りの七枚である。参考までに、一丁表の冒頭部（図Ⅳ）及び四丁表の挿絵部分（図Ⅴ）の板木の写真を上げておく。図ⅢC－1が刊記部分の拓本である。「江戸通本町三丁目西村源六」とあるところが入木であるのはこの拓本からも明白。その左にもともと「浪速　心斎橋筋順慶町渋川清右衛門」とあったはずのところは削り取られている。前引の国立国会図書館蔵本は、刊記がこの形になってから刷られたものであろう。なお、この板木の刊記部分、図ⅢC－2の板木写真に矢印で示したように、もともと全体が入木である。これも板木を調べていると時折出くわす事例であるが、この『四鳴蟬』の場合は現存版本と照らして見るに、版権の移動に伴う処置ではなく、最初に板木を仕立てる際に施された入木であったと見受けられる。材を板木として仕立てる際に、木の節があって彫りにくい時にかような処置をする例が他にも確認されるが、この場合もおそらくそれであろう。

板木整理番号	収録丁数	板木寸法（単位耗、丈×幅×厚さ）
515	1、2、3、4	765×200×19
514	5、6、7、8	780×199×18
513	9、10、11、12	780×198×16
1058	13、14、15、16	777×198×19
512	20、21、22、23	774×200×18
1059	24、25、26、27	777×196×18
1057	28、29、30、31	777×200×18

表Ⅰ　「四鳴蟬」の板木

現存の板木を版本と比較対照してみると、題簽・見返し、首一・首二、引一・引二・引三、それに本文の十七・十八・十九丁の板木が見当たらない。失われた板木の丁の収め方は、他の板木の例なども参照してみると、題簽・見返しを除く八丁を板二枚に収め、題簽・見返しは他の本のそれと一緒にしてあったのではないかと思う。したがって、三枚ほどの板木が失われていることになる。この『四鳴蟬』のように板木が揃わずに残っているような場合は、分割所有という問題も考慮に入れなければならない。が、この『四鳴蟬』の場合、あとで触れるように板木が何軒かの本屋で分割所有されたと考える状況には無く、また他の例に照らしても分割所有にしては分け方が不自然で、本来揃って動いていたものがある時期に何らかの物理的な理由で失われたと考えてよいかと思われる。なお、現存の板木は奈良大学蔵本・京都府立資料館蔵本と校合するに、不審箇所なく完全に一致する。念のために、図Ⅵに二十二丁の板木拓本・版本を対応して挙げておこう。因みにもう一つ付け加えておけば、この『四鳴蟬』の板木は墨の付き方が大層浅い。およそ近世の本屋は、板木を使って印刷をしたあと、板木に付着した墨をきれいに洗い流すということをしていない。その結果、印刷を重ねれば重ねるほど板木の刻面、つまり凹状になっている彫り込みの箇所に墨が堆積して行き、かさぶた状態を呈することになる。そのかさぶたの厚さ、つまり墨付きの度合いも板木が伝えてくれる近世出版現場の重要な情報の一つで、具体的な部数までは分からないものの、その本が「かなり刷られた」とか「そこそこ刷られた」

とか「あまり刷られていない」ということを判断する目安となる。二百年以上使用された『撰集抄』『因果物語』などの板木は、凸状に彫られた文字と文字の間が殆ど埋まるほど墨が堆積し、彫り込み部のかさぶたも分厚い。それらに比べると、図Ⅳの写真からも判るように、『四鳴蟬』の板木は墨付きの浅さがとりわけ目に付く。それは『四鳴蟬』がそれほど多くは印刷されなかったことを意味している。京都府立資料館蔵本の奥に東陵学人が「・・・本書は流布すること稀なる珍籍なり」（昭和辛卯初夏記）と言う付箋を添えているが、残存版本の少なさから考えても『四鳴蟬』はあまり多くは印刷されず、出版期間も長期には亘らなかったものと思われる。

それでは、この『四鳴蟬』の板木がなぜ佛光寺に残っていたのであろうか。それについて考えるためにはこの書の版権の移動を、言い換えれば板木の移動を押さえる必要がある。この書の版権は、図Ⅲに示したように、

A渋川・山崎版　→　B渋川・西村版　→　C西村単独版

と動いて行ったと考えられる。先ずAからBへの動きを見てみることにしよう。『享保以後大阪出版書籍目録』（以下、『大阪出版目録』と略称する）によれば、この『四鳴蟬』は明和七年十一月に柏原屋（渋川）清右衛門によって出願され、同年十二月二十七日に許可が下りていることが確認出来、彼が版元であることは疑いを容れない。初版刊記に渋川と並んで出る山崎金兵衛は、相版元ではなく江戸での「売出し」委託先であろう。『享保以後江戸出版書目』（以下、『江戸出版書目』と略称する）にその記載が無いのがやや不審ではあるが、いずれにせよ『四鳴蟬』の板木は初版当時すべて柏原屋清右衛門の手許にあった筈である。そしてその後、何らかの事情で「売出し」が山崎金兵衛から西村源六に変更になり、刊記部に入木修正され、Bの形で出版が継続されと考えるのが自然であろう。この段階でも板木は柏原屋清右衛門の手許を動いていないと思われる。

この「売出し」先変更の経緯について、少し立ち入って考えて見てみることにしよう。調べてみると、初版で「売出し」を委託された山崎よりも、実は西村の方が柏原屋との縁は深い。『江戸出版書目』によれば、西村源六は享保十二年三月から文化十二年二月までの八十八年間に版元・売出しを含めて八百二十五点の出版に関与しているが、柏原屋清右衛門の売出しを務めた例が少なからずある。これを一覧表（表Ⅱ）にしてみよう。なお、佐古慶三氏「浪華書林渋川称觥堂伝」（『上方文化』第五号、昭和三十七年六月）に拠れば、柏原屋清右衛門は宝暦から明和にかけて二回代替わりをしている。分かりやすいように、その事実を表Ⅱに挿入して示した。

表Ⅱ　柏原屋清右衛門・与市・与左衛門版元　西村源六売出し書目

割印の年月	書名	版元名
享保十八年正月	陽脈痘疹良方	柏原・寺田
十八年四月	薬種名寄后集	柏原屋清右衛門ほか二軒

二十年七月	寿福用文書翰墨蔵	柏原屋清右衛門ほか一軒
元文三年十二月	絵本珍口記	柏原屋与市ほか五軒
同　右	聖意無尽蔵	柏原屋清右衛門
寛延元年十二月	長門戊辰聞槎	渋河清右衛門
同　右	和漢唱和付録	渋河与市
二年十二月	運筆麁画	柏原屋清右衛門
同　右	英草紙	柏原屋清右衛門
三年十月	勺鏡	柏原屋清右衛門
三年十二月	絵本画英	柏原屋清右衛門
同　右	貝尽浦乃錦	柏原屋清右衛門
同　右	誹諧五百仙	渋川与市
同　右	和讃披雲録	渋川清右衛門
四年六月	糸のしらへ	柏原屋与市
同　右	女文選料紙箱（再板）	柏原屋清右衛門
宝暦元年十一月	絵本拾葉	柏原屋清右衛門
二年三月	説法百花園	柏原屋与市
二年十一月	早引節用	柏原屋与市
三年三月	傷寒百問	柏原屋清右衛門
同　右	浄土真宗聖教目録	柏原屋清右衛門
同　右	方服図儀	柏原屋与市
四年十一月	養要論	柏原屋清右衛門
五年三月	薬品弁惑	柏原屋清右衛門
五年九月	ゑ本野山艸	柏原屋清右衛門
同　右	古帖揃	柏原屋清右衛門
五年十二月	開巻一笑	柏原屋清右衛門
六年六月	青湾茶話	柏原屋清右衛門
同　右	廿四輩道中記	柏原屋清右衛門
七年三月	増補早引節用集（再板）	渋川与市
宝暦八年八月	柏原屋清右衛門（正常）が没して世継ぎが無いので、弟の与市（有常）が清右衛門を襲名。	
宝暦九年十二月	万福百人一首（再板）	柏原屋清右衛門
同　右	誹諧花得集	柏原屋清右衛門
十年九月	早引節用集	柏原屋与市
十一年六月	周南先生文集	渋川清右衛門
十二年十二月	大谷送法彙景	柏原屋清右衛門
同　右	医道日用綱目	柏原屋清右衛門
十三年三月	万宝百人一首大成（再板）	柏原屋清右衛門
同　右	勧化詠歌奥義抄	渋川清右衛門
同　右	医王耆婆伝	柏原屋清右衛門
同　右	牘記甕記	柏原屋清右衛門
同　右	領解問答	柏原屋清右衛門
同　右	早引節用集（再板）	柏原屋与市

十三年十二月　雅游漫録　柏原屋清右衛門
明和元年閏十二月　浄土真宗亀鑑　柏原屋清右衛門
二年三月　絵本草錦　柏原屋清右衛門

明和二年八月　柏原屋清右衛門（有常）、与左衛門と改名。
九月　娘婿（方常）、清右衛門を襲名。

明和二年九月　女文選料紙箱（再板）　柏原屋清右衛門
三年三月　繁野話　柏原屋清右衛門
三年六月　役氏集要　柏原屋清右衛門
四年六月　新刻詩経　柏原屋清右衛門
四年十二月　東行紀行　柏原屋清右衛門
同　右　熙春随筆　柏原屋清右衛門
五年三月　倭百人一首玉柏　柏原屋与市
五年九月　新刻早引節用　柏原屋与左衛門
六年六月　万福塵功記　柏原屋清右衛門
同　右　御文興要　柏原屋清右衛門
同　右　弾誓上人絵詞伝　柏原屋清右衛門
同　右　実悟記拾遺　柏原屋清右衛門
六年九月　早引節用真字付（再板）　柏原屋与左衛門
六年十二月　女用知恵鑑　柏原屋清右衛門
同　右　投壺今格　柏原屋清右衛門

七年十二月　古篆論語　柏原屋清右衛門
同　右　浄土真宗聖教目録　柏原屋清右衛門
同　右　万宝全書（再板）　柏原屋清右衛門
同　右　絵本写宝袋（再板）　柏原屋清右衛門
八年十二月　女大学　柏原屋清右衛門
九年六月　画宝　柏原屋清右衛門

安永元年十二月　女用文章糸車　柏原屋清右衛門
同　右　小部集要　柏原屋清右衛門
三年十二月　女用文章倭錦　柏原屋清右衛門
五年十二月　早引節用集真字付　柏原屋与左衛門
＊共同売出し山崎金兵衛
六年六月　早引節用集（再板）　柏原屋与左衛門
九年十二月　茶器価録　柏原屋与左衛門

天明二年七月　早引節用（小本再板）　柏原屋与左衛門
同　右　続茶器価録　柏原屋清右衛門
五年三月　女万歳宝文庫　柏原屋清右衛門
六年三月　早引残字節用　柏原屋与左衛門
同　右　肥後孝子伝　柏原屋与左衛門
六年九月　早引真字入（再板）　柏原屋与左衛門
六年十二月　外科重法記（再板）　柏原屋与左衛門
七年三月　古今和歌集打聴　柏原屋与左衛門
八年六月　早引節用集（再板小本）　柏原屋与左衛門

同　右	大全早引節用集	柏原屋与左衛門
寛政元年九月	古今和歌打聞	柏原屋与左衛門
二年十月	早引節用集（再板）	柏原屋与左衛門
三年三月	女大学宝箱（再刻）	柏原屋清右衛門
四年一月	経典余師小学之部	柏原屋清右衛門
五年二月	早引節用集（再板）	柏原屋与左衛門
五年十二月	早引節用集（再刻）	柏原屋与左衛門
同　右	勢語古意	柏原屋与左衛門
六年十月	和漢銭彙	柏原屋清右衛門
七年一月	四書白文	柏原屋与左衛門
七年六月	四書経典余師	柏原屋与左衛門
七年十一月	早引節用集	柏原屋与左衛門
八年五月	早引節用集	柏原屋与左衛門
八年十月	古今和歌集ひなことは	柏原屋与左衛門
同　右	大全早引節用集	柏原屋与左衛門
九年十一月	筆海重法記大成	柏原屋与左衛門
同　右	青蘿発句集	柏原屋与左衛門
同　右	孝経略解	柏原屋与左衛門
十一年五月	早引節用集（再板）	柏原屋与左衛門
十一年九月	女大学宝箱（再板）	柏原屋清右衛門
十二年十月	早引節用集（再板）	柏原屋与左衛門
享和三年閏正月	女大学宝箱（再板）	柏原屋清右衛門
文化元年九月	早引節用集（再板）	柏原屋与左衛門
二年六月	大全早引節用集（再板）	柏原屋与左衛門
三年九月	早引節用集（再板）	柏原屋与左衛門
六年三月	早引節用集（再板）	柏原屋与左衛門
八年八月	大全早引節用集（再板）	柏原屋与左衛門
九年十月	早引節用集（再板）	柏原屋与左衛門
十一年八月	早引節用集（再板）	柏原屋与左衛門

表Ⅱ冒頭の「陽腋痘疹良方」は正しくは「湯腋痘疹良方」で、『江戸出版書目』では柏原としか記さないが、『大坂出版書目』によってそれは清右衛門であることが確認出来る。先にも触れたように、『江戸出版書目』によれば、西村源六が享保十二年三月から文化十二年二月までの間に関与した出版物は八百二十五点であった。うち**表Ⅱ**に示したように西村が柏原屋清右衛門・与市・与左衛門の売出しを務めた例は、年代的な偏りなく享保十八年正月から文化十一年八月までの間に計百十点に及ぶ。つまり、西村が関与した出版物のうち約十三％が柏原屋清右衛門・与市・与左衛門版元の書物であったわけで、西村の営業活動に柏原屋が占める割合は決して小さいものではない。これを柏原屋の側から見るとどうなるのか。やはり『江戸出版書目』によれば、柏屋清右衛門・与市・与左衛門の名前で江戸で売り出した出版物の数は合計百六十四点で、うち百十点、つまり全体の約六十七％を西村が扱ったという計算になり、柏原屋にとっても江戸表での売り捌き

に西村源六は欠かせぬ存在であったことが知られる。

一方、『四鳴蝉』初版に名を連ねた山崎金兵衛は宝暦八年十二月から文化四年六月までの間に、版元・売り出しを合わせて三百五十七点の出版物に関与した本屋であるが、その山崎と柏原屋清右衛門・与市・与左衛門の関係はどうであったのだろうか。これも**表Ⅲ**として次に挙げてみる。なお、書名の頭に＊印を付けたものは西村絡みの出版物であるが、これについては後に詳述する。

表Ⅲ　柏原屋与市・与左衛門・清右衛門版元　山崎金兵衛売出し書目

宝暦十二年十二月	絵本勇見山	柏原屋与市
安永二年九月	文論詩論（再板）	柏原屋与左衛門
安永五年九月	易占要略（再板）	柏原屋与左衛門
同　右	高士伝	柏原屋与左衛門
五年十二月	＊早引節用集真字付	柏原屋与左衛門
七年九月	琴組証歌集	柏原屋清右衛門
七年十二月	昼夜重宝記（再板増補）	柏原屋清右衛門
八年九月	難経発揮	柏原屋与左衛門
八年十二月	絵本詠物選	柏原屋与左衛門
九年十二月	＊医道日用綱目（再板）	柏原屋清右衛門
同　右	絵本通宝志（再板）	柏原屋清右衛門
同　右	＊早引節用集真字付（再板）	柏原屋与左衛門
天明四年十二月	＊絵本拾葉二篇	柏原屋与左衛門
五年三月	萩の枝折	柏原屋清右衛門
文化四年六月	＊女大学宝箱	柏原屋清右衛門
同　右	磨光韵鏡余論	柏原屋清右衛門

一見して明らかなように、西村に比べて売出し点数は十六点と極端に少なく、山崎が関与した出版物の五％に満たない。しかも明和八年十二月刊の『四鳴蝉』以前の実績といえば、宝暦十二年与市版元の『絵本勇見山』一点だけである。かように両者の柏原屋との関係を比較してみると、『四鳴蝉』の売出し先が山崎から西村へと動いたのは、むしろ逆ではないかという感じさえして来る。が、ここでもう一軒の本屋に注目してみることにしよう。それは、与左衛門・清右衛門の暖簾内であったと思われる柏原屋佐兵衛である。この本屋については前引の佐古氏論文で、元文期には伝馬町に寛政期には順慶町に店があったことを示した上で、「おそらくは柏原屋清右衛門・同与左衛門の別家ではないかと考えるが」「挙証がつかめない」としておられるのだが、氏の推測は正しかった。この柏原屋佐兵衛が与左衛門・清右衛門の暖簾内らしいことを示す文書が『大坂本屋仲間記録』第八巻収録の「差定帳二番」に出ている。この文書については旧稿『「芭蕉」という利権（一）』（奈良大学紀要三十一号）で小本俳諧七部集の出版について考察した折に、『京阪書籍商史』からの引用で触れたことがあるが、いま「差定帳」に拠ってその内容を次に要約してみよう。

該当の文書は、柏原屋与左衛門・村上伊兵衛相合版の『早引節用集』および柏原屋清右衛門版の『女大学』の「重板」（海賊版）が、仙台で作られ江戸表で出回ったので、三人の「惣名代」として柏原屋佐兵衛が江戸へ下り首尾よく相済んだとする四通の文書である。いま、事の起きた順番に、仮に**文書Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ**と並び替えて示す。

文書Ⅰ　安永三年三月付　山崎金兵衛が仙台藩江戸屋敷御留守居役御役所に宛てたもの

・仙台表柳川庄兵衛が出版した『女大学宝箱』と『近道指南節用集』という書物は、大阪の柏原屋清右衛門版の『女大学宝箱』及び柏原屋与左衛門版の『早引節用集』を「其侭之かぶせ彫りニ板行」した「重板」であること。

・『早引節用集』は江戸の前川六左衛門が重板を出したことがあるが、その時は与左衛門が江戸へ下り寺社奉行へ願い出、宝暦十三年十一月に絶版扱いとなり、さらにその後、明和八年二月には信州松本の白木屋与兵衛が同書の重板に及び、その際は私山崎が与兵衛に掛け合い、重板並びに摺り本を取り上げ、また『女大学宝箱』の方は明和六年八月に江戸の常陸屋茂右衛門が重板を出したので「私共」掛け合い重板の板木並びに摺本を取り上げ清右衛門方へ渡したという経緯もあること。その経緯も、両書が「清右衛門・与左衛門両人古来よりの株」であることを示すものであること。

・今回の重板一件につき、早速大坂表の両人へ「右の段、書状を以って申し遣はし候へば」、「両人ともニ罷り下り、御出訴申し上げ」る意向であること。

・「御大家様御名」が出て大事に至らぬうちに、「重板之板木弐品、並びに出来本残らず」「召し上げられ」両人に渡して下さるよう、「私、数年来商売仕入店ニ御座候」故を以って「両人に成代り」、「御願申し上げ候」こと。

文書Ⅱ　安永三年五月八日付　山崎金兵衛・大坂柏原屋佐兵衛連名で江戸三組御仲間衆中に宛てたもの

・右の一件、「佐兵衛下向」以前に、山崎の願書により仙台藩江戸家老から国家老に伝えられ、仙台町奉行所にて「右重板之弐品」の「板木割り捨て」となり、「売残り本女大学三部、近道指南節用五部」が四月廿九日に江戸屋敷で山崎金兵衛に渡されたこと。

・「売残り之本甚だ不足」の不審を申し上げたところ、「隠シ置き候本」「壱部ニても之無き旨」の「重板人並び町役人共連判」の「請書」も提出されており、仮に流布したとしても「買取り候て」「急度糾明致すべき段、仰せ聞かせ」られたので、「金兵衛・佐兵衛両印ニて」五月朔日に「請書」を差し上げたこと。

・右の通り相済んだので、「御仲ケ間御帳面」に記録の上、「右弐品之重板」「御見当りも候はゞ」金兵衛へ御知らせ願いたいこと。

文書Ⅲ　安永三年五月朔日付　柏原屋清右衛門・柏原屋与左衛門・代

佐兵衛・山崎金兵衛連名で、仙台藩江戸屋敷御留守居役御役所へ提出した文書Ⅱの内容の請け書。

文書Ⅳ　安永三年六月五日付　柏原屋与左衛門・清右衛門連名で大坂御行司衆中に宛てたもの。

・『女大学宝箱』と『早引節用集』重板の件で、「三月廿日」に「両人代として」「佐兵衛」が「江戸表江下向」したこと。

・「右一件、五月朔日別紙三通之通り、滞り無く相済み」、五月八日に江戸行司へ帳面記載を申し入れ、五月十一日の惣参会で披露して貰ったので、大坂の仲間帳へも記載の上、仲間中へも披露して欲しいこと。京都行司へも知らせて欲しいこと。

以上、この四通の文書によって、柏原屋佐兵衛が柏原屋清右衛門・同与左衛門の暖簾内であったらしいことが判明する。その一方で、**文書Ⅰ**に山崎金兵衛が柏原屋清右衛門・同与左衛門「両人」について「私、数年来商売仕入店ニ御座候」と述べていることが注目される。同文書からは、山崎が明和六年に清右衛門版『女大学宝箱』の、また明和八年には与左衛門版『早引節用集』の重板処理に力を尽くしたことも知られるのだが、先の**表Ⅱ**からも判るように、**文書Ⅰ**の執筆年次である安永三年三月以前に、山崎が扱った柏原屋清右衛門・同与左衛門関係の出版物は

宝暦十二年十二月　絵本勇見山　柏原屋与市
安永二年九月　文論詩論（再板）　柏原屋与左衛門

の二点しか無い。ここで生じるのが、たったこれだけの実績で「数年来商売仕入店」と言えるだろうか、またこれだけの付き合いで果たして仙台藩江戸屋敷へ乗り込んで大立ち回りを演じる義理があるのか、という疑問である。山崎にそのように言わしめ、また振舞わしめた理由は何か。そこで考えなければならないのが、清右衛門・与左衛門の暖簾内柏原屋佐兵衛との関係である。次に、柏原屋佐兵衛版元の出版物の売出しを山崎金兵衛が務めた例を『江戸出版書目』から拾ってみると、**表Ⅳ**のようになる。なお、参考までに、西村源六が売り出しを努めたものも**表Ⅴ**として挙げてみる。

表Ⅳ　柏原屋佐兵衛版元　山崎金兵衛売出し書目

明和二年六月	天道録	柏原屋佐兵衛
二年十二月	狂詩選	柏原屋佐兵衛
六年三月	算学定位法	柏原屋佐兵衛
八年十二月	天工開物	柏原屋佐兵衛
安永四年十二月	墨色伝	柏原屋佐兵衛
同　右	養鼠訣（板元山崎、売出し柏原屋佐兵衛）	
六年十二月	頓阿日発句	柏原屋佐兵衛
同　右	元明清書画人名録	柏原屋佐兵衛
九年十二月	卜養狂歌拾遺	柏原屋佐兵衛
天明四年十二月	狂歌藻塩草	柏原屋佐兵衛

五年六月　鬼貫発句集　柏原屋佐兵衛
寛政元年三月　経典余師孝経　柏原屋佐兵衛

表Ⅴ　柏原屋佐兵衛版元　西村源六売出し書目

明和四年十二月　狂歌鵜の真祢　柏原屋佐兵衛ほか一軒
五年六月　文徴明行書千字文　柏原屋佐兵衛
八年六月　狂歌酒百首　柏原屋佐兵衛
安永九年十二月　雨節東海道　柏原屋佐兵衛
寛政七年六月　小学正文　柏原屋佐兵衛

表Ⅱ・表Ⅲとは対照的で、柏原屋佐兵衛との関係で見れば、西村よりも山崎の方がいくぶんか縁は深い。**表Ⅱ・表Ⅲ**だけを見ていると、『四鳴蟬』初版の売り出しとして山崎が選ばれたことに違和感があるが、柏原屋佐兵衛が柏原屋清右衛門・同与左衛門の暖簾内であったと考え、強固とは言えないまでも佐兵衛と山崎とのそれなりの縁を思えば、明和八年に清右衛門が出した『四鳴蟬』の売り出しとして山崎が出てきてもそれほど不自然ではないということになろう。先に**文書Ⅰ**で見た明和八年二月の『早引節用集』重板の一件での山崎の働きも、『四鳴蟬』売出しを委託される一つの要因となったかもしれない。

さて、では『四鳴蟬』の売出し先が山崎から西村へと変更になったのは何時のことであったろうか。それを考える一つの手掛かりとして、『江戸出版書目』から西村・山崎の相版を拾ってみると、次の**表Ⅵ**のようになる。

表Ⅵ　山崎金兵衛・西村源六相版書目

安永元年十二月　なけ入雪の栞　板元　山崎金兵衛・西村源六
天明八年六月　四書集経　板元願人　山崎金兵衛・西村源六　ほか七軒
寛政三年九月　七経孟子考文補遺（焼失之分・・・此度彫直し）　山崎金兵衛・西村源六　ほか六軒
寛政五年九月　插花季枝折　板元願人　山崎金兵衛・西村源六

その数四点と極めて少なく、両者がそれほど親しくはなかったことを示して余りあるが、『四鳴蟬』の一年後の安永元年十二月に『なけ入雪の栞』を相版で出していることは取り敢えず注目してよかろう。もう一つの手掛かりは**表Ⅲ**の中にある。**表Ⅲ**に挙げた山崎売出しの十六点のうち、頭に＊印を付した五点は西村絡みであることは先に断っておいたが、**表Ⅶ**としてもう少し詳しく見てみよう。

表Ⅶ　西村源六絡みの山崎金兵衛売出し書目

安永五年十二月　早引節用集真字付　　柏原屋与左衛門

＊この書、表Ⅱに示したように、共同売出しが西村源六である。

九年十二月　医道日用綱目（再板）　柏原屋清右衛門

＊この書、宝暦十二年十二月に「板元柏原屋清右衛門　売出し西村源六」として出る。

九年十二月　早引節用集真字付（再板）　柏原屋与左衛門

＊五年十二月に見えるものの再板か。共同売出しの西村外れる。

天明四年十二月　絵本拾葉二篇　　柏原屋与左衛門

＊宝暦元年十一月に「板元柏原屋清右衛門　売出し西村源六」として出る「絵本拾要（葉）」の続編。

文化四年六月　女大学宝箱　　柏原屋清右衛門

＊寛政三年三月に「再刻　板元柏原屋清右衛門　売出し西村源六」、同十一年九月に「再板　板元柏原屋清右衛門　売出し西村源六」、享和三年閏正月に「再板　板元柏原屋清右衛門　売出し西村源六」として出る。

表Ⅵと**表Ⅶ**から、西村と山崎が安永期に入って接触を持ったことが知られる。つまり、安永元年十二月に『なけ入雪の栞』を相版で出し、同五年十二月には柏原屋与左衛門版『早引節用集真字付』の売出しを共同で引き受け、その後、与左衛門・清右衛門関係のいくつかの再版ものの売出しを西村が山崎に回したような形跡がある。このような両者の交渉を踏まえ、かつ『四鳴蟬』の板木がさほど長期に亘って使用されたとは思われない状態であることなども考え合せて見ると、『四鳴蟬』の売出し先が山崎から西村へと動いたのは安永に入って間無いころではなかったかと思われる。

それでは、売出しが山崎から西村へと動いた理由は何であったのだろうか。これについても明確なことは判らないが、次のように推測しておきたい。上方ものの売出しを江戸の本屋が引き受ける際に、どのような契約が結ばれたのかは不明であるが、なにがしかの手数料は当然支払われたのであろう。しかも出版経費は上方の板元が負担している筈であるから、単純に考えれば、江戸の本屋は売出しを多く引き受ければ引き受けるだけ利益は増えることになる。つまり極端な言い方をすれば、江戸の小規模の本屋にとって上方ものの扱い量が死活を左右することにもなりかねない。そこに、江戸の本屋どうしが上方ものの売出しに食い込もうとして競い合うという状況は容易に想像されるところである。**表Ⅱ・表Ⅲ**を見る限り、『四鳴蟬』の売出し先としては山崎よりも西村の方がはるかにふさわしい。本来そうあるべきところに、柏原屋佐兵衛との縁を以って山崎が割って入ったのではないだろうか。そしてその後、西村から柏原屋清右衛門への申し出により売出

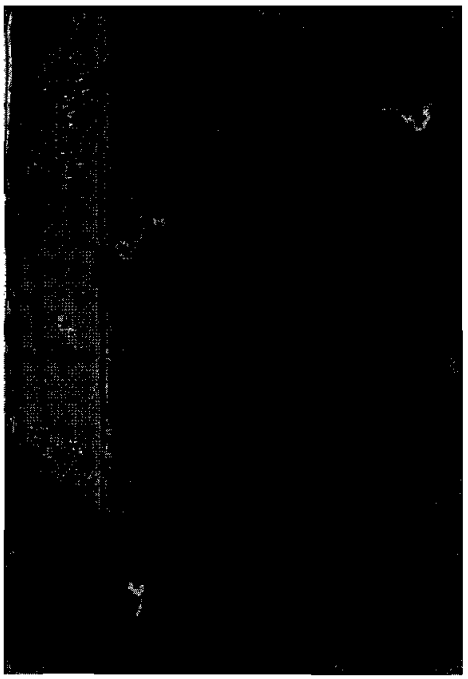
し先の変更が行われた、と考えると一応理解は出来るような気がする。初版段階で西村が売出しを務めた清右衛門・与左衛門版元の出版物の再版を引き継ぐかのような傾向の見える安永期の山崎は、西村のおこぼれに預かっているような印象すら感じられる。安永三年当時、重板を巡ってあれほどの大立ち回りを演じて見せた『女大学宝箱』も、山崎が扱うことを得たのは再刻・再板を重ねた三十三年後の文化四年のこと。そこに、柏原屋との関係では終始西村の後塵を拝さざるを得なかった山崎の立場が象徴されているような気がする。

さて、売出しが西村に変更された後も、板木はやはり板元の柏原屋清右衛門の手許にあったと思われるが、その後、『四鳴蟬』の板木からは版元の柏原屋清右衛門の名前が削られ、西村単独版の形式で出版されることになる。つまり、BからCへの移動である。版本だけを追っていると、西村が版権を買い取って単独版で出したかに見えるのだが、板木が京都の佛光寺に残って来たことを思うと、板木が一度江戸へ動いているとは考えにくい。西村はやはり売出し先のままで、版権は上方で別の本屋に移ったと見るのが自然である。それは何という本屋であったかは今のところ不明とするしかないが、大坂の本屋では無いことは断言出来そうである。何となれば、刊記部の入木箇所はもとの「東都」を残して山崎と西村の名を入れ替えてあるが、それは同じ江戸の西村が山崎から売出しを引き継いだからで、刊記部の入木変更ではよく見られるところ。版元の部分も、もし同じ「浪速」での版権の売り買いであれば、そこは触らなかった筈である。つまり、「浪速」まで削っているということは、版権の移動先が大坂ではなかったことを意味する。また江戸とは考えにくいことも先に触れた。とすれば、あとは京都しか無い。『四鳴蟬』の版権すなわち板木は、浪速の柏原屋清右衛門の手を離れたあと、京都の某書店の蔵するところとなり、理由は不明ながらその某書店の名前を入れぬまま西村単独版の形式で一時出版に使用され、明治中・後期に近世の出版機構が崩壊した後に物理的な理由で佛光寺へ運び込まれて、うち数枚が失われて現在に至ったと、いまのところは考えておきたい。

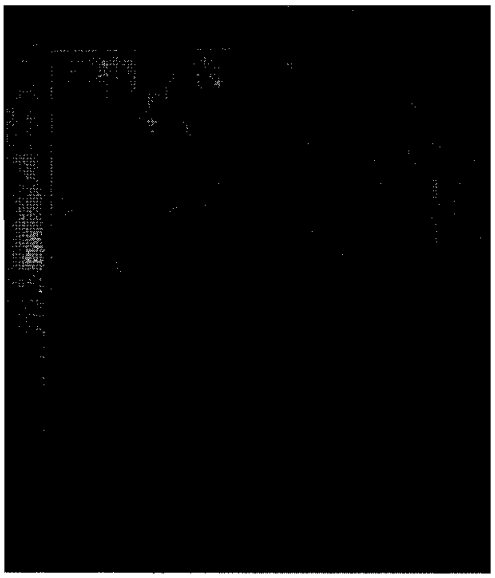
平成十七年八月二十日　記

＊この稿は平成十六年度奈良大学研究助成を受けて成ったものである。

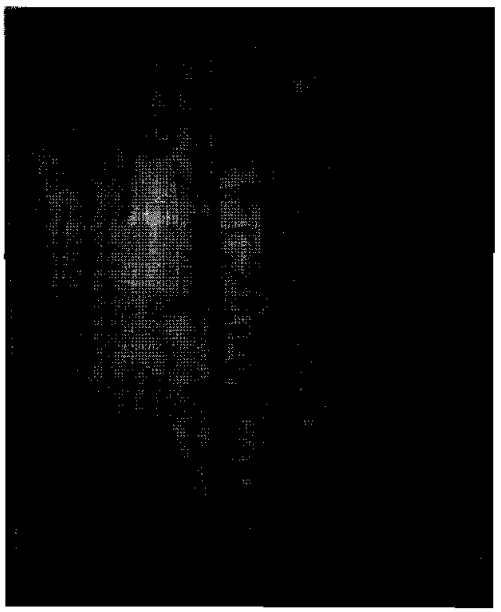
図Ⅱ　見返し



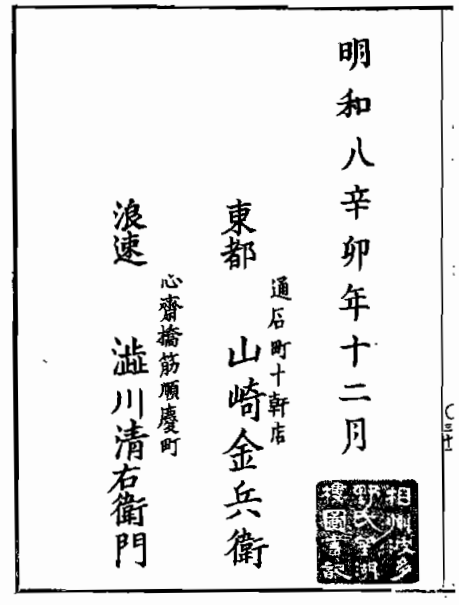
図Ⅰ　表　紙



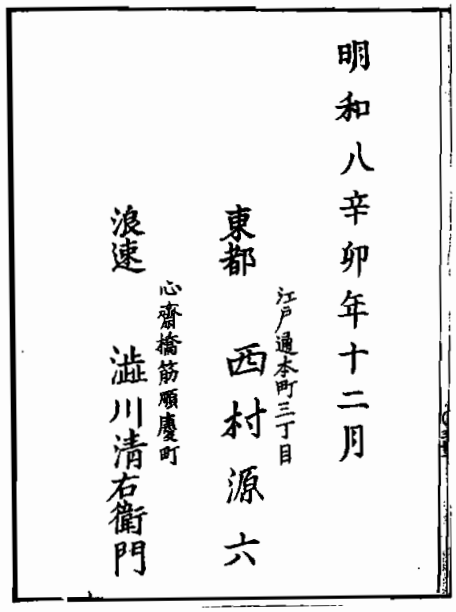
図Ⅴ　4オ挿絵



図Ⅳ　1オ冒頭部（部分）

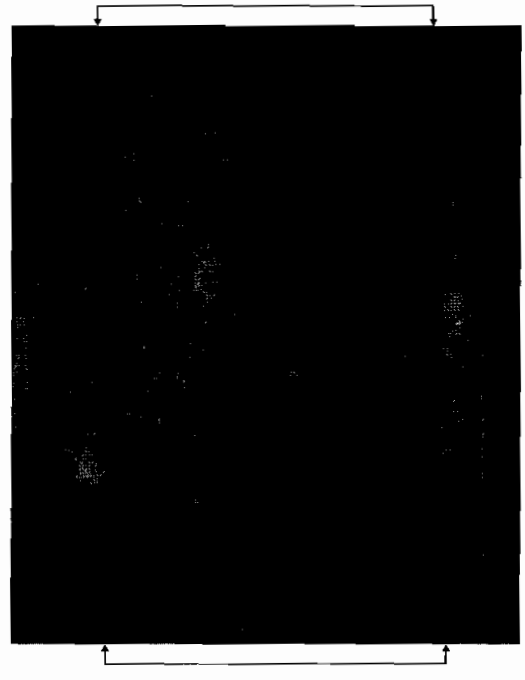


図ⅢA



図ⅢB

図ⅢC－1



図ⅢC－2

図VI 板木拓本

陛下搖連爺孃相携西國順禮胸間木札常繫依然夫
應有焉夫應有焉有情便是撲的挑沒情因何得打上
天難騰的失手自戀情迷 局 娘 誰知有此技音頭好
調鼓掌齊六波羅隊將永井右馬頭是有名之士為切
宮踊之技難得誠意伏侍實是感怡深矣 花園偶携 花
園手携乞巧燈憂眉不伸從外來 局 娘 你來得恰好方纔
希聽典庭音頭青宮鶴千代一雙踊歳一時鳴采興動
六波羅館代應答可知多吉乞早為我說喜事則嗚見
其悅答愈難開音淚垂浸襟 宣 明 呀內子不因必可告吉
不說好歹只泣何為好無分曉見此纔抬頭 花 園 你可傷
了聖運數奇事有障礙那慳貪邪見的齋藤太郎左衛
門伺候君前將奴近日纔說得館公解怒那燈籠雜飾
及鞦衣文彩十分奉評深刻說得做右馬頭是無眼識
目人一般我公分外憤恨取此乞巧燈以代公謎言使
命即太郎左衛門今將到來憶憶痛恨痛恨若或身
邊有寸鐵齋藤脇腹穿刀痕奴亦自盡在君前便拔了
羞顏吞氣回來無詞覆於兩尊丈夫憐察咬齒泣恐宣
子局娘怪旋變色右馬頭俊聰知趣 宣 明 罷罷此乞巧燈

版本

陛下搖連爺孃相携西國順禮胸間木札常繫依然夫
應有焉夫應有焉有情便是撲的挑沒情因何得打上
天難騰的失手自戀情迷 局 娘 誰知有此技音頭好
調鼓掌齊六波羅隊將永井右馬頭是有名之士為切
宮踊之技難得誠意伏侍實是感怡深矣 花園偶携 花
園手携乞巧燈憂眉不伸從外來 局 娘 你來得恰好方纔
希聽典庭音頭青宮鶴千代一雙踊歳一時鳴采興動
六波羅館代應答可知多吉乞早為我說喜事則嗚見
其悅答愈難開音淚垂浸襟 宣 明 呀內子不因必可告吉
不說好歹只泣何為好無分曉見此纔抬頭 花 園 你可傷
了聖運數奇事有障礙那慳貪邪見的齋藤太郎左衛
門伺候君前將奴近日纔說得館公解怒那燈籠雜飾
及鞦衣文彩十分奉評深刻說得做右馬頭是無眼識
目人一般我公分外憤恨取此乞巧燈以代公謎言使
命即太郎左衛門今將到來憶憶痛恨痛恨若或身
邊有寸鐵齋藤脇腹穿刀痕奴亦自盡在君前便拔了
羞顏吞氣回來無詞覆於兩尊丈夫憐察咬齒泣恐宣
子局娘怪旋變色右馬頭俊聰知趣 宣 明 罷罷此乞巧燈

Printing Blocks of Bukkoji : "Shimeizen"

Kazuaki Nagai